

★イヤ・スピーカー《SR》の歴史

イヤ・スピーカーEar-Speakerという名称は、1960年にスタックスが初めて開発したコンデンサー型ヘッドフォンに名づけた商品名です。似たような名前で、イヤ・フォンがあり、これは耳栓式になっている簡易型、ヘッドフォンというのは、それより高級になり、耳当パッドとヘッド・バンドをそなえたものを意味します。

なぜコンデンサー型がふつうのダイナミック型とは《比較にならないほどの高忠実度》を持つことができるか、それは既にお話ししましたが、実際に作り、それを商品化するともなれば、これには非常に細心の注意と努力が要求されます。

すぐれた材料の開発が先決条件であるのは申すまでもありませんが、設計・製造に当っては、1枚の振動膜と2枚の固定極について、 10^{12} オーム以上の《絶縁度》、10ミクロン以内の《平衡度》が要求され、そして、徹底的に清浄化された恒温恒湿の製造室で組立てなければ、高忠実度商品として満足できるものは生れないのです。

1960年に初めて陽の目を見たイヤ・スピーカーはSR-1、月産わずか20台に満たない、ほとんど常識では考えられない数量でした。

1965年から、さらに忠実度の高いイヤ・スピーカーを開発すべく努力が重ねられました。主眼は、振動膜と固定極、そして耳当パッドです。そして1968年にSR-3が生まれました。ここでは6ミクロンの振動膜と、より精度の高い固定極、密閉度のよい耳当パッドが採用され、最適なアコースティック・フィルターの併用により、前型のSR-1にくらべ、低域がゆたかに、音のバランスが良くなり、位相のみだれが減少して方向感・定位感が非常に改善されました。このSR-3は発売以来もっとも広く愛用され、音楽愛好家、オーディオ・ファン、そしてプロフェッショナル用として、放送局、レコード会社、学校でも最高の評価を与えられてきました。

一方、このSR-3を製品化する以前に、スタックスでは、少なくとも当社の音楽愛好家である技術陣が心から満足できる、きわめて高い忠実度をもつイヤ・スピーカーを、ほぼ完成していました。これは材料を精選し、《良い音》のためならどんな手間もいとわない技術陣が、一つ一つ《手づくり》しないと作れないものですが、ヘッドフォンが単にスピーカーの代用品としか認識されない当時においては、仮に製品化しても到底みとめられない、というのが大方の意見でした。

これが《SR-X》の原型だったのです。手作りで、マスプロ的採算の概念から言えば、まことに型破りの製品をあえて世に送るのは、SR-3により、部屋の音響特性にいっさい影響されないヘッドフォンの良さと、透きとおる羽根のような軽量の振動膜から生れる音の自然さが、世界中から最高の評価を与えられたからでした。《SR-X》で聴いてみると、音楽は言うまでもなく、SLの轟音や汽笛、日常の会話、すだく虫の音、etc, etc, ………、すべての音という音を《改めて聴き直したく》なります。

（附言すれば、SR-Xを開発中に得られた技術——振動膜のベース材質と導電物質——を、SR-3に応用したのが、1971年発売のNewSR-3です）。